

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六

落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録す

す

其の六

【原文・書き下し文】

- | | | |
|---|--|---------------------|
| 1 | 簾箔疎疎泄 _レ 夕陽 _一 | れんぱくそそ せきやうも |
| 2 | 西園一半尚春光 | せいえんいっばん な しゆんこう |
| 3 | 和 _レ 煙芳草遍 _二 階砌 _一 | けむり わ ほうそう かいせつ あまね |
| 4 | 經 _レ 雨蒼苔上堵牆 | あめ へ そうたい どしやう のぼ |
| 5 | 綠意紅情何可恃 | りよくい こうじやう なん たの |
| 6 | 遊蜂戲蝶任他狂 | ゆうほう ぎちやう さもあらばあれくる |
| 7 | 吟 _レ 詩聊擬 _二 招魂賦 _一 | し ぎん いはなふ しやうこん ふ |
| 8 | 坐向閑窓炷篆香 | ざ かんそう む たんこう た |
- 簾箔疎疎たりて夕陽泄れ
西園一半 尚お春光
煙に和す芳草 階砌に遍し
雨を経し蒼苔 堵牆に上る
綠意・紅情 何ぞ恃むべけんや
遊蜂・戲蝶 任他狂うに
詩を吟じて聊か招魂の賦を擬せんとし
坐して閑窓に向かいて篆香を炷く

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

- | | |
|---|----------|
| 1 | ○●○○○●●◎ |
| 2 | ○○●●●○○◎ |
| 3 | ○○○○○●● |
| 4 | ○●○○○●●◎ |
| 5 | ●○○○○●● |
| 6 | ○○●●●○○◎ |
| 7 | ○○○○●○○● |
| 8 | ●○○○○●●◎ |

七言律詩

『広韻』下平十陽(陽・牆・狂・香)、十一唐(光)同用。『平水韻』下平七陽。

【校勘】

『清狂遺稿』以外に参照すべきもの無し。

【現代語訳】

其の六

すだれは編み目も粗く夕陽が漏れてきて、西側の庭の半分ほどは春の光が残っている。

靄のかかった芳しい草が階段いっぱいに生え、雨後の青々とした苔は塀にまで這い上がっている。

花や葉の気持など頼りなどできようか、ままよ、蜂や蝶が狂わんばかりに草花を求めて飛び回わらせておこう。

詩を吟じて招魂の賦でも作ってみようと、閑かな窓辺に向かつて香を焚くのである。

【語釈】

1 簾箔 〈簾〉も〈箔〉もすだれ。 疎疎 〈疏疏〉と同じで、まばらなさま。ここはすだれの目が緻密に編まれていないことをいう。 尾藤二洲 (1745-1813)「題を分かちて簾を隔つるの燈を得」(詩会で詩題を分けて抽選で「隔簾燈」という題が当たる)(分題得隔簾燈)「詩に〈一点 螢火に似て、簾隔つれば転た「ますます」疎疎たり(一点似螢火、簾隔轉疎、疎)〉。 2 西園 第一句の〈夕陽〉の沈みゆく側の西の庭。 尚 まだ、なお。 3・4 〈煙〉と〈雨〉、〈芳草〉と〈蒼苔〉のそれぞれのが、潤いのあるしっとりとした晩春の情景をイメージさせる。 3 和煙 もやが混じる。〈煙〉は、本詩其一の語釈3〈緑煙〉参照。唐、李約「従軍行」(従軍のうた)「(従軍行)三首」詩の其二に〈宮柳「軍營の柳」 煙和するの暮、閑榆「閑所のニレ」 雪を帯ぶる春(營柳和煙暮、閑榆帶雪春)〉。 芳草 よい香りのする草。本詩其四の語釈3〈芳草〉参照。 遍 すみずみまで存在する。 階砌 〈階〉も〈砌〉も階段。唐、劉長卿「薛拋「人名」の涉県を宰するを「涉」という県を統治する」送る(送薛據宰涉縣)「詩に〈槐陰「槐の木が作る影」 堂殿を覆い、苔色階砌に上る(槐陰覆堂殿、苔色上階砌)〉。 4 蒼苔 緑のコケ。南斉、謝朓「中書省「役所名」に直す(宿直する)「(直中書省)「詩に〈紅藥「赤い芍薬の花」 階に当たりて「階段の辺りで」 翻り、蒼苔砌に依りて「階段に沿って」上る(紅藥當階翻、蒼苔依砌上)〉。 堵墻 〈堵〉も〈墻〉も家の周りの垣根。 5・6 赤い花や青々とした葉もいつまでも春を彩るわけでもなく、当てにならないことをいう。 5 綠意紅情 〈緑〉の草や〈紅〉の花にも気持があると比喩的に用いる。清、乾隆帝「芳洲に采る(采芳洲)」に〈敞軒「開け広げられて見晴らしのよい建物」 階下 水池「氷の張った池」に俯せば「下の方を見ると、緑意・紅情 発くこと尚お遅し(敞軒階下俯水池、緑意紅情發尚遲)〉、 釈六如 (1737-1801)「忘帰亭の四時詠、応教「貴人の求めで詩を詠むこと」十二首忘歸亭四時詠、應教十二首」詩の其五に〈遊車(遊覧のための車)の過る処 雨 塵を清め、緑意・紅情 正に人を嗾す「草花に魅了されてついつい人を引き入れてしまう」(遊車過處雨清塵、緑意紅情正嗾人)〉。 何可 どうして……できようか、いやできないという反語。「仙」「清狂遺稿」上 十九歳に〈長生 何ぞ得べけんや、不死 豈に其れ然らんや「どうしてそうなることがあるうか」(長生何可得、不死豈其然)〉。 恃 頼りになる、当てになる。 任他 なるようになれ、そうなったとし

ても構わない。頼山陽(1780-1832)「長崎の謡十解」(十首)〔長崎謡十解〕詩の其九に「髯側き・釵横ままにして〔女性の髯や・簪が乱れている〕夢一場〔女性との逢瀬〕、尤雲・殢雨〔尽きせぬ男女の愛情をいう〕 任他狂うに〔狂おしいままになっても構わない〕(髯側釵横夢一場、尤雲殢雨任他狂)」。6遊蜂戲蝶 花を求めて飛びまわる蜂や蝶。南宋、陸游「駅舎の海棠已に過ぎて〔旬が過ぎる〕感有り(驛舎海棠已過有感)」に「遊蜂・戲蝶 空しく自ら忙しきも、豈に知らん 美人の西廂〔西側の部屋〕に在るを(遊蜂戲蝶空自忙、豈知美人在西廂)」。明、文徵明「石田〔沈周の号〕の落花に和して答う(和答石田落花)十首」詩の其十に「穠緑〔青々と茂った葉〕已に艶〔華麗な花〕を蔵する処無く、它の蜂蝶の尚お徘徊するを笑う(穠緑已無藏豔處、笑它蜂蝶尚徘徊)」。狂 狂ったように夢中なさま。「秋海棠」詩(玉川大学教育博物館所蔵標題『月性詩稿』)に「晚艷〔夕暮れの華麗な秋海棠の花〕 応に風露に因りて染まり、秋香 豈に蝶蜂をして狂わしめんや〔秋に薫る秋海棠では季節が異なる蝶々や蜂を夢中にさせられないではないか〕(晚艷應因風露染、秋香豈使蝶蜂狂)」。7吟詩 この六首の組詩「連作詩」を詠むことをいう。聊 まあ、かりそめに。「中秋」(『清狂遺稿』下 三五歳)に「寂寥 何ぞ以て良夜に酬いん、半盞〔半分だけ注がれた盃〕 聊か保命春〔日本酒の名〕を傾けん(寂寥何以酬良夜、半盞聊傾保命春)」。招魂賦 「招魂」は、楚の宋玉の作とされる「招魂」に、「魂よ帰り来たれ(魂兮歸來)」というフレーズが繰り返され、人の死を悼んでその魂を呼び戻そうとする。「賦」は、長篇の韻文。月性が恩師の篠崎小竹の訃報に接して作った「小竹先生の訃信を得て、哭する二律を賦す(逝去に泣き悲しむ律詩二首を詠む)〔得小竹先生訃信、賦哭二律〕」詩(『清狂遺稿』下 三五歳)の其一にも「訃音 披いて短檠釭〔足の短い燭台〕に對す、望哭し〔故人の居た方を遠く見遣つて慟哭する〕魂を招かん」とし恨み腔〔身体全体〕に満つ(訃音披對短檠釭、望哭招魂滿腔)とある。但しここは宋玉の作とされる「招魂」の最後に「目は千里を極め、春心を傷ましむ(目極千里兮、傷春心)」と人の不在が本来楽しむべき春を愛でる心も傷つけられると記されていることに着目しての引用で、行く春を悲しみ引き戻そうとすることをいう。8閑窓 散りゆく花を眺められる静かな窓辺。唐、曹唐「南嶽の馮處士〔在野の知識人〕に贈る(贈南嶽馮處士二首)」詩に「鳥 深樹に啼けば靈藥を斲り、花 閒窓〔閑窓〕に同じ」に落つれば道書〔道教の書〕を見る(鳥啼深樹斲靈藥、花落閒窓看道書)。炷 香を焚く。篆香 もとは螺旋状のお香を指すが、ここはお香一般と解しても構わない。お香は法事によく使われるが、ここは行く春を惜しむ気持ちを込めての所作を以て、この六首の詩を閉じる。

【補説】

この「落花吟」詩が、藏春園で学ぶ塾生たち共有の題材「課題詩」となっていたことは、『同韻集』(恒遠俊輔氏所有、福岡県求菩提資料館寄託所蔵)と銘打った塾生たちの詩集に、「落花吟」と題し

て恒遠政吉〔二首〕・釈又新〔其八・其十二〕・吉野本巖〔其八・其十・其二十二〕の三人が次韻詩を作っており、また『藏園同社詩集一』〔同上〕にも、釋慈謙が同題の次韻詩二首を作っている。月初のこの六首の組詩は、龍護の「落花吟三十首」の中から選び取ったもので、其一……其六とは龍護の「落花吟三十首」の順番に対応するものではなく、釈又新の其十一は月性の其三と同じ韻字を用いていることから、月性の組詩の其三は龍護の「落花吟三十首」の十一番目の詩の次韻詩である。

なおこの詩を収める『清狂遺稿』せいきやういこう全二冊は、月性開設の私塾、時習館じしゅうかんで学んだ大洲鐵然おおすてつねん・天地哲雄ちてつおが、月性没後三十四年の明治二十五年（一八九二）に編纂したものであり、上冊には全一八八首〔組詩をひとつに数えると一五八題〕、下冊には全一二六首〔二〇六題〕を収め、月性の漢詩集としてはいちばん多くの詩を集め、しかもできるだけ時代順に並べるといふ苦心の書であり、国立国会図書館デジタルコレクションで容易に見ることができる。もともと大洲鐵然がこの『清狂遺稿』の編纂者は、それまで残されていた写本〔手書きの本〕や刊本〔版木に字を彫って印刷した書物や活字を組んで印刷した書物〕などを参考に編纂しているが、月性展示館〔山口県柳井市遠崎729〕や松陰神社宝物殿至誠館〔山口県萩市椿東1537〕などに現在もなお所蔵する写本や刊本に収録する詩とかなり重複することが確認できる。しかし『清狂遺稿』に収めるこの「落花吟六首」を載せる写本は未確認で、加えて既に【語釈】で言及した佐賀の武富圀南たけとみいなん（1806-1856）や坂井虎山さかいこ（1798-1850）の評語を付した写本についてもその存在は未確認であり、今後の発掘が期待される。